

「氷室」巻頭句一覧

巻頭句〔各号の右の句は氷壺集・左の句は氷室集〕

・・・・・・・・・・・・・・・・

平成4年（1992年）

12月号

詩心を高く保てと梅雨の雷	京都	吉田みゆき
玉水といふ駅過ぎし薄暑かな	京都	吉田みゆき

平成5年（1993年）

12月号

星うすき夜を匂ひけり葛の花	神奈川	友永美代子
天明も天保もかくや掌の稲穂	福島	猪狩ひさし

11月号

涼しさや寝釈迦のごとく肘枕	岡山	吉永 暁史
立て膝といふも涼しきねねの像	京都	吉田みゆき

10月号

雪溪に置く鳶の輪も昼深し	神奈川	石田 実
風鈴のしきりに鳴ってゐるを買ふ	大阪	川口雨太郎

9月号

六月の花嫁がかけ椅子古ぶ	京都	安田 守男
退職のその後沙汰無し柿の花	京都	吉田みゆき

8月号

蒲公英の絮吹く未来あるごとく	神奈川	友永美代子
雁帰る頃の旅寝を思はずや	神奈川	石田 実

7月号

桜薬降るや教へることに倦む	京都	吉田みゆき
蜥蜴出てみれば稲村ヶ崎かな	神奈川	石田 実

6月号

場所変へて眺めてゐたり山桜	埼玉	柴崎 節子
巡禮に辛夷街道つづきけり	埼玉	柴崎 節子

5月号

梅くぐり命透きゆくおもひかな  
春嵐鍼力のバケツ庭にあり

神奈川 友永美代子  
京都 村田 昭子

4月号

醪沸くこゑに耳立て寒の酒庫  
産土に腕白老いて御慶かな

神奈川 友永美代子  
神奈川 石田 実

3月号

落葉踏みまなざしとほく立つ牡鹿  
船笛のきくきく来たる寒夜かな

熊本 伊津野ひろ  
神奈川 石田 実

2月号

ことごとく風やりすこし枯蓮  
庭の障子しめて喪の帯独り解く

京都 吉田みゆき  
京都 村田 昭子

1月号

砂山の砂くぼめ行く秋の旅  
雨乞ひに別れに人は銅鑼を打つ

神奈川 友永美代子  
熊本 伊津野ひろ

平成6年(1994年)

12月号

葛の花だらだら峠登り口  
秋麗ふたつ並びし島の井戸

群馬 田川 江道  
京都 前田 攝子

11月号

花火果つ雨の匂ひの風過ぎて  
夕焼の眼をして富士の戻り馬

神奈川 友永美代子  
京都 村田 昭子

10月号

夏山を塗るクレヨンの匂ひけり  
夕焼けて試合に負けし子の帰る

群馬 田川 江道  
京都 前田 攝子

9月号

梅雨深しバツハの曲の眠たさよ  
躑躅から線路始まる始発駅

神奈川 友永美代子  
京都 尾池 和夫

8月号

草笛や少年の目して信濃人

神奈川 友永美代子

簸川野のそのひとところ麦の秋

島根

梶谷 一夫

7月号

片栗や風をりをりに獣の香  
露座仏の厚き胸板春の風

神奈川  
京都

友永美代子  
吉田みゆき

6月号

にががと和へてくれけり露の臺  
涅槃図の中の風音聴きあたり

神奈川  
京都

石田 実  
吉田みゆき

5月号

真ん中にて凍鶴となりにけり  
わらわらと雪降りしきる賤ヶ岳

神奈川  
京都

石田 実  
吉田みゆき

4月号

賀状書き相見ぬ月日増やしけり  
子が受けてほとほと長き初電話

神奈川  
島根

友永美代子  
梶谷 一夫

3月号

時雨るるや指もて拭ふコンパクト  
また川に戻る綾取り冬ぬくし

神奈川  
京都

友永美代子  
吉田みゆき

2月号

障子貼る夫との刻の謚けさに  
月を待つ亡夫あるごとく石に座し

神奈川  
埼玉

友永美代子  
柴崎 節子

1月号

秋時雨ことこと鳴れる落し蓋  
羽閉ちしままの猛禽秋深し

京都  
京都

鈴木 つゆ  
吉田みゆき

平成7年（1995年）

12月号

学校の裏道を行く無月かな  
種採りの夜は指先の荒れ少し

京都  
和歌山

前田 攝子  
市川 誠子

11月号

鄙なれば間遠き花火賞でてをり  
船窓に水中花置き旅惜しむ

和歌山  
京都

坂本 野洲  
前田 攝子

10月号

手に載せて出雲茅の輪を家づとに  
炎天へ出でゆく息を整ふる

島根 原田 小華  
京都 吉田みゆき

9月号

峽空へ孤高の螢とびにけり  
梅雨霧や中海狭くなりみたる

和歌山 宮本須娥子  
島根 原田 小華

8月号

焙炉場の隅に立てかけ竹箒  
水離れ自在となりし蓮の葉

京都 前田 攝子  
京都 吉田みゆき

7月号

満開の辛夷夕日を離れざる  
花の座に膝を崩して母想ふ

埼玉 柴崎 節子  
埼玉 柴崎 節子

6月号

嫁にやる気などさらさら山笑ふ  
何時来ても丁度よき時期梅の花

島根 原田 小華  
石川 成田 賢了

5月号

康治忌や雪舞へば雪の声を聞き  
骨壺の前の飲食春寒し

島根 原田 小華  
京都 吉田みゆき

4月号

耳たぶの薄きも淋し寒に入る  
着ぶくれて亡き夫の声遠くしぬ

京都 吉田みゆき  
埼玉 柴崎 節子

3月号

合格を手にせぬ子らに日短か  
切干を炊いて女に敵七人

京都 前田 攝子  
京都 吉田みゆき

2月号

繪馬堂の繪馬木枯に鳴りやまず  
観音はけだしをのこや冬日濃し

埼玉 柴崎 節子  
京都 吉田みゆき

1月号

人に吹き石庭に吹き秋の風  
月に祈る十指に余る願もち

京都 吉田みゆき  
京都 村田 昭子

平成8年(1996年)

12月号

棒道といふ戦道萩ゆたか  
吾亦紅夕べの風を殖やしけり

山梨 沼 ひろお  
京都 前田 攝子

11月号

壺に挿すきぶしの青実露のまま  
葛咲くやケールカーに通過駅

埼玉 萩原 百代  
京都 前田 攝子

10月号

こぶしもて塩をほぐせる炎暑かな  
日盛りの遠くの風を見てをりぬ

埼玉 萩原 百代  
京都 吉田みゆき

9月号

戦国の世の下駄小さし青葉冷  
黒南風や天守にしるす落城記

京都 前田 攝子  
京都 有岡 巧生

8月号

木洩れ日を走り抜けたるくらべ馬  
栃高し花咲かす木と咲かぬ木と

京都 有岡 巧生  
山梨 沼 ひろお

7月号

戦捷祈願の写真遺せり花捧ぐ  
朧夜のどこかで鳴れる電子音

三重 加島まこと  
京都 吉田みゆき

6月号

辛夷咲く長寿の里と聞こえたる  
動くとも思へぬ大地耕せり

山梨 沼 ひろお  
京都 有岡 巧生

5月号

滝返つる百の仏の坐すごとく  
紅梅の少し褪せたる寒さかな

京都 前田 攝子  
島根 原田 小華

4月号

寒日和身から離れぬ影法師  
獣らの眠りし里の牡丹鍋

茨城 吉田 進  
京都 有岡 巧生

3月号

花びらの遠くに散りて寒牡丹  
空也忌や京のディスコの黒扉

京都 吉田みゆき  
京都 富井 康夫

2月号

身のほどといふ恋をして近松忌  
村出るはこの橋一つ鳥兜

京都

吉田みゆき

京都

有岡 巧生

1月号

土管より子供顔出す秋の暮  
屋根に乗り松の手入れをしてをりぬ

京都

有岡 巧生

京都

多田芙紀子